

けいはつろく はしもとさな
『啓発録』(橋本左内)

H25.5.18(土)木村民男記

幕末の志士に橋本左内(1834~1859年)という人がいます。越前国(福井県)に生まれ、15歳の時に大阪に出て、適塾(てきじゅく)で医者緒方洪庵(おがたこうあん)等に師事し、蘭方医学を学びます。その後、水戸藩の藤田東湖(ふじたとうこ)、薩摩藩の西郷吉之助(さいごうきちのすけ)、熊本藩の横井小楠(よこいしょうなん)らと交流し、福井藩主の松平春嶽(まつだいらしゅんがく)に側近として登用され、藩医や藩校(明道館)学監心得(がっかんこころえ)となります。14代将軍を巡る将軍継嗣(けいし)問題では春嶽を助け、一橋慶喜(ひとつばしよしのぶ)擁立運動を展開し、幕政改革を訴えました。また、幕藩体制は維持した上で西欧の先進技術を導入するという開国論を展開しました。しかし、安政の大獄で捕縛(はぼく)され、斬首(ざんしゅ)となりました。享年(きやうねん)26歳でした。

橋本左内が数え年15歳の時に自分の生き方の指針として記した5か条が「啓発録」です。今の中学校2年生の時に書いた左内の「志」とはどんなもののでしょうか。

- ①「稚心(ちしん)を去る」：稚心とは、子供じみた心のことである。自分の好きな遊びにばかり熱中し、安楽なことばかり追いかけ、親の目を盗んで勉強や稽古事をおろそかにし、いつまでも父や母に甘えていてはならない。私は立派な武士になるために、稚心を去らねばならないと考える。
- ②「気を振るう」：気とは、人に負けまいと思う心、すなわち負けじ魂を持ち、努力をしないで負けるということは恥ずかしいことであり、それを知って悔しく思っ頑張ろうとする心のことである。士気を引き立てて奮い起し、人には負けぬという決意を忘れぬことが大切である。
- ③「志を立つ」：志とは生き方の決意を固めるということである。志を立てるには、聖賢(せいけん)の教えや歴史の書物を読んで、その中から深く心に感じた部分を書き抜いて壁に貼り、いつもそれを眺めて自己を省みて、自分の足らぬところを努力することが大切である。そして、自分が少しずつ前進するのを楽しみとすることである。
- ④「学に勉む」：勉学とは、優れた人物の立派な行いを習い、自らもそれを実行し、自己の力を出し尽くして目的を達成するまで続けるということである。それには、書物を読んで我が知識を深めるだけでなく、忠孝の精神を養うことと文武の道を修行することが大切である。
- ⑤「交友を択(えり)ぶ」：交友とは、自分が交際する友人のことであり、友人には益友(えきゆう)と損友(そんゆう)とがあるからその違いを見極めて選ぶことが必要である。益友(えきゆう)には自分から積極的に交わり、大切にすべきである。損友(そんゆう)がいたら、自分の力でその人の良くない面を正しい方向へ導いてやらねばならない。

「啓発録」を短くまとめました。満14歳の橋本左内がどんな人間になろうとしたのか考えてみてください。そして、自分はどんな人間になったらよいのかを考えてみてください。